

「エモい」は他力？

一、左右の話

これは大垣にある美濃路の道しるべです。
中仙道と東海道を西北と東南に結ぶ道が美濃路で、北に向かって右側が江戸で、左側は京都です。



ところが、この道しるべには「左 江戸道」「右 京みち」と書いてあります。最初に見た時、どうして左右が逆なのだろうと思って写真に撮りました。帰ってきてから、写真をよく見ると上の方に梵字が書いてあります。この梵字はキリークで阿弥陀様を表します。

これは単なる道しるべではなく、阿弥陀様ご自身が左の方を指し示しながら、「こちらが江戸だぞ」と言われ、右手で指し示し「こちらが京だよ」と教えておられるのです。私は、自分を中心に見ていたので、逆だと思っただけですが、そうではなかったのです。江戸時代にはこういう見方が当然だったのでしょう。

仏さまの側から見るとい見方です。

仏さまから見ると、私たちの見え方はとても狭いものです。でも、私たちは自分が見ている世界を全てだと思っています。

この道しるべ（仏様）はそういう見方だけでない世界をも指し示しています。

一、前後の話

今度は前後の話です。

昔から不思議に感じてきた言葉があります。それは「前」という言葉です。場所的には前は私の前面です。ところが[時間的に使いつつかは過去の意味](#)になります。「この前」「以前」「前世」といっつうに。英語でも同じかどうかわ調へてみる。J. B. C. と使われるように、before も「前」と同じな意味。

でも、私は前に進みます。とすると、未来に向かって進むというイメージが異なってきます。違和感が出てくるのです。

このことについて中島岳志さんから、ヨーロッパでも同じように疑問を持った人たちがいて、とても面白い警えをポール・ヴァレリーというフランスの詩人が語っていることを教えてくださいました。

その警えは、

「湖に浮かべたボートを漕ぐように、人は後ろ向きに未来に入っていく」といっつうことです。

この警えは、今まで悩んでいたことを一気に晴らしてくれました。私たちは過去を見つめながら未来に進んでいくのだ。だから過去は前にあるのだといっつうことを。

そして、何よりも未来は私たちには見えません。一寸先だってわからないのです。

中島さんは、

「行く先がわからない（手漕ぎのボートをまっすぐに進ませるためには、進むのと逆の方向を正視しなくてはなりません。人間の時間の歩みもそれと同じで、過去を直視することによってこそ、まっすぐ前に進んでいくことができるのではないか。・・・過去を直視した時、そこに見えるのは「死者たちの風景」です。・・・過去や死者と向き合うことによってこそ未来をまなざすことができる。」と語っています。

三、与格構文

岐阜の東別院で中島岳志さんの法話「となりの親鸞」を聞きました。

久しぶりに我を忘れて聞き入った体験でした。

中島さんは自分の体験をベースに語っていて、自分は器であり、その器に様々な体験が訪れるのだと言われました。聞いているとその体験自体が語っているように感じられるのです。

まさにこの「一形」に訪れた見事な物語りでした。

中島さんは、そっつう器である自己を「与格的主体Ⅱ（器としての私）」と表現されています。

した。

それは、ヒンディー語の与格構文からきていて、「与格的主体」は親鸞さんの「親鸞一人がため」につながるものだと言われるのです。

これは「一形」とか(安富さんの)「方便論的個人主義」と言い換えても変わりません。

中島さんによるとヒンディー語には与格構文というのがあるそうです。

与格構文とは、人格の意志や力の及ばない、感情、生理的な現象、嗜好、状況、事態…

などを表現する特徴的な構文で、与格とは「私に」、対して主格は「私が、私は」。

例えば、「(与格)にとって(主語)が得られる」というような表現をします。

与格は日本語だと目的語として使われますが、ヒンディー語の構文は違うのです。

例えば、

〈日本語〉

私は幸せだ

↓ 私に幸いを得られた

私はあなたを愛している

↓ 私にあなたへの愛がやってきて留まっている

私はヒンディー語ができる

↓ 私にヒンディー語がやってきて留まっている

私は〜を持っている

↓ 私の近くに〜がある

〈ヒンディー語〉

中島さんはこれをヒンディー文字でボードに書かれました。

器である私に、ヒンディー語がやってきてどこどまっている。そのヒンディー語はどこからやってきたのかというと、はるかな過去から様々な人を経て今この私にとどいた。

器であるからこそ、どこからかやって来たり、とどまっていることができるのです。

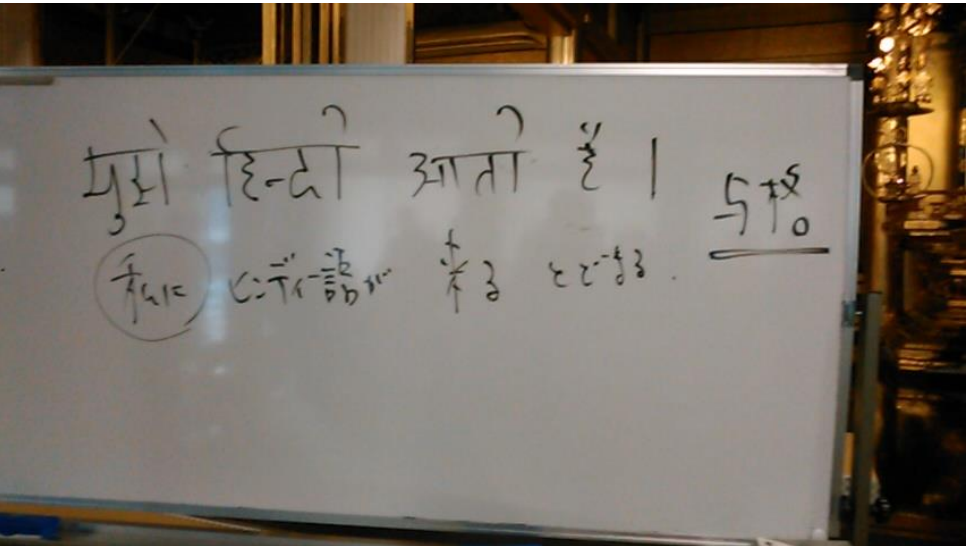
そして、この器が「我を持って」「いるので」「与格的主体」と名づけたのでしよう。

私は以前から善導大師の「上一形を尽くし…」の「一形」という言葉が好きで一生よりもよく使っています。私は器としての身体＝一形で人生の様々な体験を受け止めているのですね。

こういう与格構文の表現そのものがすでに他力的であると感じます。

逆に例に挙げた日本語がいかにも自力的であるかと感じます。

このように、言語そのものが思想を含んでくる



こともわかり、私たちはそういう影響を受けていることも実感できます。サンスクリット語も似ているそうです。

そういう言語を中国語に訳すときに、故人はかなり苦勞したのではないのでしょうか。

法話で中島さんが強調されたもう一つ大事なことは、「死者とともに生きる」ということ。これは分裂し対立している現状をつなぐ大事な視点です。

我々は間違える存在であり、それを前提にした智慧がここにあると感じます。

四、「エモい」は他力

正月に若い方に与格構文のことを説明していたら、ドイツ語の ES (不定代名詞)と同じですねという。

ドイツ語の es は英語の it にあたる言葉で、英語でも it rains. という様に使うけど、これは「なにものが雨が雨を降らせる」という意味。つまり、雨が主語ではないので、与格的な使い方。どうやら与格的な思想は世界中にあることがわかります。

(es の哲学的追求…言葉 (＝存在) そのものが語っている)

[ハイデガー超入門——『暇と退屈の倫理学』をめぐる國分功一郎さんとの…](#)

「さらに、今若い人が使っている『エモい』という言葉も似ていますよ。」「と言われ、戸惑ってしまいました。「エモいって?」と聞くと、エモーションナルの略語で、感情に動かされた状態を言うという。

「嬉しかったり、切なかったり、寂しかったり、そういうとき、エモいって使うんですよ。つまり『いとあわれ』ですね。」「なるほど。

「また、ストリートに感情を表現できないモヤモヤとした時にも使われます。」「つまり、この感情はどこからやってくるのかという点、It rains と同じで、わたしという器 (与格的主体) にどこからかやってくる様を顕しているところなんです。

とすると、このような「他力」の感覚は若い人には当たり前の感覚なのかもしれません。若い人たちの感覚を見直さなくてはと感じた次第です。

名号が器としての私にとどいたのが信心。そして口から零れ出るのが念仏。その時、「人間が言葉語るのではなくて言葉が語るのだ。名号が語っているのだ。はるか昔から私を呼び続けている南無阿弥陀仏が。」「

これは大峯頭師の言葉です。名号そのものが私たちにとどき、器としての私にとどまっているのだ。